

未就園児保育における

親子遊びについて考える

— 保育臨牀的かわりを媒介に —

京野 尚子

●二歳児って何ておもしろいのだろう

私は、学生時代、「二歳児は、喜怒哀楽があって何ておもしろいのだろう」と感じていました。しかし、そのころ二歳児のお母さんたちは、

「ああ、この子と離れて一人の時間が欲しい!」とよく言っていたのを思い出します。当時、学生だった私は、「こんなにおもしろいになぜ?」と感じ

ていました。

その後私も母親になり、いざ出産してみると、「24時間営業の育児」と、子どもの気分の波に翻弄される「二歳児の母親」の現実に直面しました。そのとき初めて、いかにこの年齢の子育てが大変であるか、これが噂の「テリブル2」だと実感したのであります。子育ては「かわいい」だけではできない、命を守り育むことの重みを実感しました。

私が子どものいる現場に来て、約二十年以上になろうとしています。最初は、東京都の公立相談室で臨床心理士として約八年、その後は、看護専門学校や、短大で教鞭を執りながら未就園児対象の親子支援の現場に現在まで携わっております。

教育相談の現場にいましたときに日々感じていたのは、小中学生に見られるさまざまなお心の問題は、その子どもたちの記憶にない二歳あたりの親子関係のボタンの掛け違いがずっともち越されてきたことにあるのではないかと意識しました。このことから、ますます、未就園児への関心は尽きないものとなったのです。

近年、未就園児クラスを立ち上げる幼稚園も増えます。ますます二歳代の親子への関心が深まっています。

また長年二歳児の現場にいますして私が強く懸念していることは、専業主婦のお母さんの育児への負担感が増え、また、皆「よい子に育てなければ」のプ

レッシャーを感じながら頑張りすぎてしまう現状です。お母さんたちの悩みを聞いていますと、「親子で友達が近くにいない」、あるいは「本音で子育ての悩みを聞いてくれる人がいない」など、育児への孤独感が見られ、しかもお母さん自身が、自分の実母からも「よい母親にならなければいけない」という無言のレッシャーを感じているという話をよく聞きます。こうした暗黙の「よい母親像」「よい子育て像」への焦りが、お母さんたちの子育てをより難しいものへとかりたててしまっているのではないかと思います。

そこで、未就園児クラスのある日の出来事をあげて、今のお母さんと子どもたちにとって私たち保育者は何を求められているのか考えてみたいと思います。

なお、プライバシーへの配慮から、多少内容を変更して本質はできるだけ損なわないようにしています。

●ある日の出来事から

未就園児クラスでのある日の出来事です。

A子ちゃんは、お母さんと手をつないで教室にきました。私がお母さんに「A子ちゃんは、どんな遊びが好きなのかな？」と聞くと、しばらく考えてから「何だろう。いつも一人遊びしているし、お絵かきじゃないかしら……」と答えました。

そこで私がテーブルに画用紙とクレヨンを用意すると、お母さんは即座に熱心に絵を描き始めました。A子ちゃんはというと、クレヨンを持つたまま、ぼんやりと遠くを眺めているのです。

未就園児クラスの教室では、いろいろな自由遊びが展開されていて、皆自分の好きな遊びを親子で思い思いに楽しんでいました。

A子ちゃんのお母さんの画用紙は、アンパンマンやドキンちゃん、メロンパンナちゃんなど、アンパ

ンマンキャラクターでにぎやかに埋め尽くされていました。

ところがA子ちゃんの方かというと、小さな丸が一つだけ。A子ちゃんの視線の先を見ると、新聞紙で作った剣での戦いごっこを楽しむ親子や保育者の姿が見られました。そこには、悪者になってガオガオと怪獣になっている元気なB男君のお母さん、それをうれしそうに新聞で作った剣でやつつけようとするB男君やほかの子どもたちの姿がありました（未就園児クラスの良いところは、同じ部屋の中でいろいろな遊びを楽しむ姿を見られることです）。

A子ちゃんがあまりに真剣に見ていたので、

「A子ちゃん、戦いごっこが好きみたい」と私がお母さんに言うと、即座にお母さんが、

「いいえ、乱暴な遊びは好きじゃないです。私の母親も嫌いですし」と言いました。

A子ちゃんがあんまり楽しそうに怪獣ごっこを見

ていたのです、私は今度は、

「A子ちゃん、戦いごっこ楽しい？」と、A子ちゃんに言いました。

すると、とっさにA子ちゃんは、お母さんの顔を見て、それから私を見て（余計なこと言わないで）とても言いたげな鋭い視線を投げかけました。しかし、相変わらずその視線は怪獣ごっこに釘付けです。クレヨンを持つ手を止めて、食い入るように戦いごっこを見ているA子ちゃんの様子は、とても楽しそうでした。A子ちゃんが画用紙にその後も何にも描かずにいるので、

「お母さん、A子ちゃんいい顔してるね！」と言って、私はお母さんにA子ちゃんの横顔を見てもらいました。するとお母さんが、

「あら、A子が笑ってる。いつも何が楽しいのかわからなくて……」と言いました。

「A子ちゃんは、やっぱり戦いごっこに興味がある

んじゃないかしらね」と私が言うと、お母さんがB男君のお母さんを見て、

「B男君のお母さんすごい、怪獣になっている！何だか、懐かしいわ」と、ぼつりと、話をされたのです。

「私、子どものころお転婆だったんです。よく母に『ああ、お姉ちゃんはとっても女らしいのにあなたは男みたい』って言われるのがいやでした」

私が新聞紙で作った剣をA子ちゃんとお母さんに渡すと、お母さんは

「よし、やつつけるぞー」と言うと、遊びの中に突進していきました。

するとA子ちゃんもすつと立ち上がり、剣を持つてお母さんの後から歩き出したのです。

A子ちゃんは剣の扱い方がわからなくて戸惑っていたので、私が後ろから支えながら戦いに挑むと、いつしか夢中で遊んでいました。活き活きとしたお

母さんを見て、A子ちゃんに笑顔が見られるようになりまして。

帰り際に、お母さんがこんな話をしてくれました。

「A子は、おとなしい子どもだと私が勝手に思い込んでいたけれど、本当は、私に似て、やんちゃで元気な子なんですわね」と。

このような事例は、決して珍しくありません。この事例から推測されることは、A子ちゃんのお母さんが気持ちのどこかで「女の子は、おとなしくて荒々しい遊びなどするものではない」という固定観念やイメージにしばられ、気がついたらまだ二歳であるわが子にそのイメージを押し付けてしまっていたのではないかということです。しかし、親子遊びをする中でむしろお母さん自身が、実はそうした固定観念にしばられ、実母から「あるがままの自分では認めてもらえない」と思い込んでいたことに気づいていったのです。

私はよく「母子まるごと抱っこ」というのですが、私たち保育者は、お母さんも子どもたちをも外側から心身ともにしっかりと支えてあげながら、「そのままでもいいのよ、もつと肩の力を抜いてあなたらしくあればいいのよ」というメッセージを伝えてあげることが必要なのかもしれない。

● 身も心も解放されたA子とお母さん

この事例でも、A子ちゃんは戦いごっこがやりたくて、「もつとはつちやけたい。まさに暴れん坊の二歳児らしくはじけたい!」と思っていたのでしょ。未就園児クラスという集団に参加したことで初めて母子で解放されて、同じ子育てをするほかのお母さんたちとも出会うことができ、また保育者との遊びを通して自由さを取り戻していききっかけができたように思います。

また、この事例を通して私が痛切に感じること

は、がんばりすぎるお母さんたちに、「そのまんまのあなたでいいのよ、無理をしないでいいのよ」というメッセージを与えながら、世間体や社会常識の枠にとらわれることなく、やりたいことをやるというお母さんらしさを取り戻していくことを提案する必要があります。

現代は、育児の情報があちらこちらに氾濫していて何を指針にしたらよいか戸惑いがちです。まず



はお母さんたちが、もっと身も心も自由に解放される場があることが大切ではないでしょうか。

お母さんも思いきり童心に返り、もう一度子どもを取り戻すことができるような時間をもつこと、それは決して誰かに評価されるものではなく、その人らしくいられる、そんな楽しい親子遊びの時間をもてるように工夫していくことではないかと考えています。

子どもたちもお母さんをも活き活きとできるようなごっこ遊びが楽しめる、そんな未就園児クラスの実在はより貴重な場になってくるでしょう。

親子の絆をしっかりと再確認するためにも、私たち保育者とその支援のお手伝いをするのができたら幸いと思います。

(大妻女子大学短期大学部講師)

鎌倉女子大学幼稚部